

マダラナニワトンボ *Sympetrum maculatum* Oguma

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は96%、現存数は0.5であり、絶滅危惧 I A 類に相当する。

県内の産地はほぼ壊滅したので絶滅危惧 I A 類に変更する。

【形態】

成熟しても体色が赤くならず、黒化する小型のアカトンボである。

和名は成熟しても腹部の斑紋が消失しないことと、大阪で発見されたことに由来する。



♂. 長久手町阿畑, 1989年9月29日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～西三河の丘陵地を主たる分布域とし、やや飛び離れた東三河の新城市(旧作手村)も含めると12市町村で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から西部にかけて記録されている。

【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成虫は、おもに丘陵地の周辺をマツ林などに囲まれて日当たりが良く、遠浅でかつ岸周辺に背丈の低い水生植物の豊富な池沼で見られる。幼虫は、水域の浅い岸辺で得られる。

7月頃から羽化し、一旦水辺を離れるが、9月頃から成熟♂は水域に戻ってくる。1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に尾張の東部丘陵から西三河にかけて分布したが、ほぼ壊滅した。

幼虫は電気伝導度の低い「きれいな水」を好むことに加え、成虫はホシクサ類等背丈の低い植生のある遠浅部でしか産卵できないことから、護岸工事等による環境悪化が即座に絶滅につながる。また、かつて本種が見られた池沼で、オオクチバス(ブラックバス)などが放流された池のみ本種が見られなくなった例もある。なお、本種の分散力は他のアカトンボ類より小さく、1994年の渇水で失われたいくつかの産地において本種は復活しなかった。

近年、植生や水質が良く外来魚もいない本種に適した環境でも、突然絶滅する例が見受けられる。他県にて複数の池を調査した結果、ネオニコチノイド系の農薬の濃度が高く、水田に使用された農薬が池に流入し、幼虫を絶滅させている可能性が示唆されている(荻部ほか, 2019)。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【引用文献】

荻部治紀・寺山隼人・坂部 貢, 2019. 岐阜県東濃地方のマダラナニワトンボの減少要因はネオニコチノイド系農薬か? . Tombo, (61): 1-7.

(吉田雅澄)